
[成果情報名] 連作ほ場で収量低下が少ない株枯病抵抗性イチジク台木品種「キバル」

[要約] イチジク台木用品種「キバル」は株枯病に対して抵抗性であり、連作ほ場で台木として利用すると穂木品種の収量低下が少なく生育が良好となる。

[キーワード] イチジク、株枯病抵抗性台木、接ぎ木栽培

[担当部署] 豊前分場・果樹チーム

[連絡先] 0930-23-0163

[対象作目] 果樹

[専門項目] 育種

[成果分類] 新技術

[背景・ねらい]

イチジクでは、土壌病害である株枯病により樹体が枯死する問題が発生している。発病園では多量の薬剤を投入しても再発防止が困難で、生産性が著しく低下した園や廃園も見られる。また、連作した場合には、樹勢が低下する問題もある。そこで、イチジクの生産安定を図るため、株枯病抵抗性があり、連作ほ場での樹勢低下が少ない台木を育成する。

(要望機関名：南筑後普(H17))

[成果の内容・特徴]

1. 平成13年に「セレスト」を種子親に、本県育成系統「H238-107」を花粉親にして交配した交雑実生の中から選抜した(図1)。
2. 株枯病発生跡ほ場に定植した「蓬萊柿」および「榊井ドーフィン」の自根樹は7年間で60～80%の株が枯死するが、「キバル」を台木にした接ぎ木苗は枯死株が発生しない(表1)。
3. 連作ほ場では、「キバル」の利用により自根樹より収量が多くなり、自根樹では株枯病による枯死株が発生する(表2)。

[成果の活用面・留意点]

1. 品種登録出願済(第25160号、平成22年9月2日)。
2. 株枯病を虫媒伝染するアイノキクイムシに対しては抵抗性がないので、アイノキクイムシが発生した場合は薬剤防除を行う必要がある。

[具体的データ]

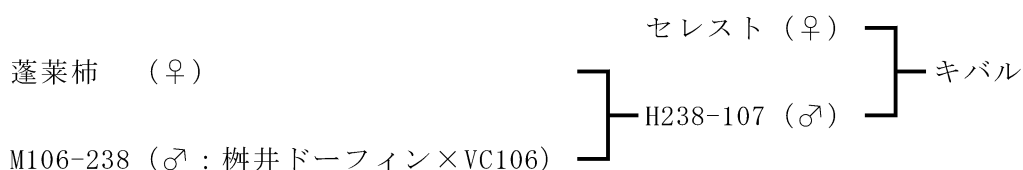


図1 「キバル」の系譜図

表1 株枯病発生跡地におけるイチジク各苗の枯死株発生程度（平成15～21年）

品種および 苗の区分	定植 本数	年次別の枯死株発生数							枯死株 発生率 (%)	
		15年	16年	17年	18年	19年	20年	21年		累計
蓬 萊 柿/キバル台	9	—	—	0	0	0	0	0	0	0
榊井ドーフィン/キバル台	9	—	—	0	0	0	0	0	0	0
蓬 萊 柿/自根	10	3	1	1	1	0	0	0	6	60
榊井ドーフィン/自根	10	4	1	0	1	0	0	2	8	80

注) 1. 「キバル」台樹は平成17年3月に、自根樹は平成15年3月に1年生苗定植。
2. 株枯病発生跡ほ場に各苗を定植し、株枯病菌胞子懸濁液を1樹当たり20ml灌注。

表2 株枯病抵抗性台木「キバル」の利用がイチジク連作ほ場における枯死株発生と収量および果実品質に及ぼす影響（平成21年）

品 種	試験区	供試 株数 (本)	枯死 株数 (本)	収量 (kg/樹)	果重 (g)	着色 割合 (%)	糖度 (Brix)
榊井ドーフィン	キバル台	3	0	28.6(143)	99.8	68	15.9
	自 根	3	2	20.0(100)	84.6	69	16.7
とよみつひめ	キバル台	3	0	25.7(154)	75.9	69	17.8
	自 根	3	0	16.7(100)	78.7	71	17.9

注) 1. 「榊井ドーフィン」は株枯病発生跡の連作地で、作土を入れ替えずに植え穴の位置も替えずに定植。樹齢は平成21年で6年生、台木の長さは15cm。「とよみつひめ」はイチジク連作地で、作土を入れ替えずに植え穴の位置も替えずに定植。樹齢は平成21年で5年生、自根区のみ4年生で、台木の長さは20cm。整枝法は「榊井ドーフィン」、「とよみつひめ」とも一文字整枝（4×2m）。
2. ()内数値は、それぞれの品種の自根区を100とした対比。

[その他]

研究課題名：防疫・省力・高品質機能を合わせ持つ革新的イチジク樹形の開発

予 算 区 分：国庫受託（農林水産研究実用化事業）

研 究 期 間：平成21年度（平成19～21年）

研究担当者：野方 仁、栗村光男、石橋正文